

ボランティア・大学の二人三脚で地域の遺産「夕日の松原」を松枯れ被害から守る

佐々木隆¹・星崎和彦^{1,2}

¹炭やきで夕日の松原まもり隊, ²秋田県立大学生物資源科学部

この度は日本海岸林学会賞（地域賞）を頂き、大変光栄に存じます。この名誉ある受賞は会員一同にとって大きな励みとなっております。

「夕日の松原」は、秋田県秋田市北部海岸から男鹿半島の付け根まで15 kmにわたって続く天王砂丘上に広がるクロマツ主体の人工林のことで、2001年に夕日の松原と命名されました。現在は約100年生前後、樹高8~20mほどの松林が広がっていて、海岸からの強風・飛砂・潮風などから暮らしを守る林となっているほか、キノコ採りに入る住民も多く、憩いの場としての役割も果たしています。

「炭やきで夕日の松原まもり隊」（以下、まもり隊と略記）は2007年9月に発足した任意団体ですが、活動自体はその5年ほど前、秋田県立大学の故小林一三名誉教授による松枯れ防除の実践的研究に端を発します。小林さんは当時、防除をしながら被害材を資源（木炭・木酢液）として再利用するというアイデアのもと大学の研究費で炭窯を建設し、研究室の学生らとコツコツ作業されていたところ、キノコ採りの住民から声をかけられ「ぜひ私達にも協力させてください」という話になり、ボランティアが加わりました。

このような展開が実現したのには理由があります。秋田県の海岸砂防林は、先人たちの試行錯誤の末にようやく形作られたものです。夕日の松原周辺も例外でなく、昔の写真では砂地がどこまでも続く荒地でした。秋田では江戸時代には飛砂のために集落ごと移転したという記録は一度や二度ではなく、周辺住民は日本海からの飛砂に日々苦しんできました。この不毛の荒地にマツが植林されたのは19世紀初頭の文化・文政年代で、これを主導した栗田定之丞や中川六衛門はそれぞれ栗田神社、蛭子神社に祀られています。しかし当時の植栽は飛砂に埋もれて成林には至らず、現在のクロマツ林はその後何度かの植林が試みられたのち、大正時代末期から昭和40年代にかけての県営事業によるものです。21世紀に入り、こうした歴史的背景を持つ松林で松枯れ被害が一気に拡大し、2005年前後には男鹿半島や本荘市内などで多くの松林が壊滅的な被害を受けました。夕日の松原の被害も顕著になる中、昔を知る地域住民としても先人たちの遺産を守っていききたいという意識があったと聞いています。ボランティアによる活動の輪はその後、クチコミを中心に広がっていき、現在（2020年12月）、まもり隊の会員数は162名となっております。

まもり隊の活動は大きく分けて3つです。中心となる活動は松枯れ被害木の伐採と炭化で、まもり隊では通常の伐倒駆除と異なり、薬剤は一切使わず老

若男女が楽しみながら、2基の炭窯で炭化を行っています。現在までに193回（まもり隊として115回）の炭化を行い、600 m³超（平均サイズで5500本相当）の被害木を炭化しました。2つ目は被害木の探索で、2009年からまもり隊および一部他団体の有志と秋田県立大学学生の混成メンバー（毎年、のべ490名ほど）で16 haのエリア内を見回り（3月末~11月末まで年9回）、枯死木発生状況を監視しています。3つ目の活動は普及啓発で、地元の環境イベントへの出展のほか、ウェブサイトや会員宛郵送による「炭やき・松くい虫情報」の発行（現在までに234号）をきっかけに、炭窯建設の助言や炭の提供を中心として県内外の計11団体と交流が生まれました。

最初の2つの活動は秋田県立大の研究とリンクしています。例えば通常の伐倒駆除は材積ベースの事業ですが、研究によると太い丸太よりも細い丸太や枝の方が1000倍前後の防除効果があり、炭やきではこれら細い部位が焚き付けに欠かせません。枯死木探索の結果は大学で集計され、研究成果に基づいて伐採・炭化の優先順位を決めた後、炭やきの材料となります。小林さんはまた、北国の冷涼な気候に即した防除体制として被害根絶から微害維持に目標を切り替えようと提唱しました。これを念頭に置いて活動を開始して18年を経た今も、夕日の松原は微害状態を維持できています。また、まもり隊の活動で得た木炭やデータから7報の学術論文が公表され、ボランティアによる防除活動にその根拠や意義を与えてきました。私たちとしては、まもり隊が取り組んできた市民参加型の防除が決して絵空事ではなかったと考えたいところです。

今回の地域賞受賞は、こうしたボランティア主体の活動と、大学との二人三脚の両方を評価していただけたのかなと感じます。私たちは今後も活動の継続に誇りを持ちつつ、市民参加型の松枯れ防除、農業に頼らない防除に一層励んでいく所存です。人口減少著しい秋田での取り組みから、もし全国で海岸林保全に携わる関係各位と何らかの交流が生まれるのであれば、望外の喜びです。関心を持たれた方はいつでも当方にご連絡いただければ幸いです（http://www.akita-pu.ac.jp/bioresource/dbe/forest/sumiya_ki.html）。

受賞にあたり推薦いただいた金子智紀氏、また炭窯建設を始め様々な支援を頂いた秋田県立大学および秋田地域振興局森づくり推進課に深く感謝申し上げます。最後に、今回の受賞とこの拙文をまもり隊の初代会長である故鈴木勝男さんおよび故小林一三名誉教授に捧げます。